

3.「長谷川コレクション」の全容

長谷川千代衛氏と愛雄氏が収集され、現在、出雲弥生の森博物館に収蔵されている考古資料、これを「長谷川コレクション」と名付けたいと思う。この考古資料群は、ほんのごく一部が山本先生によって紹介された以外、ほとんどが未公表のまま1世紀近い年月を経てきた。だが、その意義はいささかも衰えるものではない、と思う。それは、次の2つの理由からだ。

一つは資料のほとんどに墨書きの注記があること。時に土器片の一面を覆いつくすほどの過剰と思える注記もあるが、出土地点と出土状況の記録としてきわめて貴重である。

もう一つは、この資料が長谷川氏の手元を離れた後の半世紀、散逸しなかったこと。これは、旧大社公民館および旧大社考古館でこれを収蔵管理された故大谷從二氏の業績である。

「長谷川コレクション」の記録として2つの文書が出雲市文化財課に保管されている。

①「松江市長谷川千代衛氏蒐集/考古資料目録」

これは、二つ折り和紙10葉20頁に墨書された資料の一覧表である。おそらく長谷川千代衛氏が自ら書きとめられたもので、それに、表題として大谷氏の手になる「昭和三十一年九月四日／大社公民館に購入」とペン書きされたザラ紙の表紙が付く。これを以下、「千代衛目録」と略す。

②「考古資料略図」

ザラ紙の反故30枚にペン書きされた略図集⁴。表紙に「松江市雑賀町三ノ二 長谷川愛雄氏所蔵」「昭和三十一年九月四日／大社町公民館譲受購入」とある。大谷從二氏が、資料のうち主要なものをスケッチとともに記録した文書である。掲載資料のほとんどは現存するが、一部に確認できなかった資料がある。この記録を以下「大谷ノート」とよぶ。

さて、「長谷川コレクション」が草創期の島根県考古学界に大きく寄与したことについては山本先生も述べられているが、ここにあらためてその全貌を示して光をあてたいと思う。「長谷川コレクション」の意義を再検討し、資料が収集された100年前の島根を振り返ることも無意味とはいえない。

以下では、「千代衛目録」と「大谷ノート」および「山本清考古資料」をベースとし、「長谷川コレクション」の全容を示す。資料に残された注記と遺物種別をまとめた。現存する資料については、可能な限り図示することとし、現在は所在不明になっている資料の一部は「山本清考古資料」で補った。

以下、Ⅰ石器編、Ⅱ土器編、Ⅲ瓦編、Ⅳ金属器編に分類してその内容を記述したい。出土遺跡の記録はほぼないので、それらは記載の字名で示す。郡別に記述をすすめる⁵。

Ⅰ．石器編

a 簸川郡⁶

出雲大社境内遺跡（出雲市大社町杵築東）と関わる可能性のある資料が1点ある【図2-1】。現状では貼付された紙片に「杵築」とあるのを確認できるのにとどまるが、「大谷ノート」に「杵築／大社／文庫北方／谷」と記録されていて、これが出雲大社境内荒垣の西北隅にあった文庫⁷北方の谷から発見されたいとわかる。

これこそ、柴田常恵が実見して「出雲大社の神域が、石器時代の遺跡であるは一奇と云ふべき」と述べた「立派なる冠石壹個」（柴田1910）そのものとみて間違いなからう。

石器はきのこ形をしていて、頭部および頸部が認められるので「石冠」かもしれないが、その分布域からは大きく外れる（中島1983）資料なので、断定は避けたい。底面は研磨痕が顕著である。高さ9.3cm、長径10cm、短径9.3cm、重量830g。

「杵築」と注記された砥石1点がある【図5-10】。何によったかは不明だが、「大谷ノート」には「鹿倉山」とあるので、この砥石は現在の大社小学校・中学校敷地に広がる鹿蔵山遺跡（出雲市大社町杵築南）の出土品とみてよからう⁸。角柱状をした砂岩質の砥石で、一端は丸い。端面には十字形の研ぎ跡がある。長さ8.2cm、幅4.2cm、厚さ3.2cm、重量140g。

「千代衛目録」「大谷ノート」に掲載されない石器に「ヒノ川郡/上朝山」「コモリ穴岩」と注記のある砥石破片1点がある【図5-11】。砥面を1面だけ残す資料である。「コモリ穴岩」の記載から、出雲市朝山町内朝山神社附近と推定されるが⁹、周辺に遺跡は知られていない。

これ以外に、「大谷ノート」によると、「大社直線道¹⁰」と注記された磨製石斧破片（長さ7cm・幅5.5cm）1点、および、「知井宮村間谷」（出雲市知井宮町^{あんや}間谷）で採集された閃緑岩製の磨製石斧破片（長さ11cm・幅5.5cm・厚さ2.5cm）があったようだが所在不明である¹¹。

b 八束郡

長谷川千代衛・愛雄氏が旧八束郡乃木村在住¹²であったこと、そして愛雄氏が正2～7年（1913～19）に八束郡内の小学校に勤務されていたこともあって資料は多い¹³。宍道村と来待村での採集資料はなく、宍道湖南岸では玉湯村¹⁴がいちばん西である。

玉湯村 玉湯村（現・松江市玉湯町）での採集資料は6点あるが、うち1点（「大字玉造字大門」採集¹⁵）は自然礫なので、残り5点を紹介する。年代の判明するものはすべて明治年間の採集品である。

まず、小型の打製石斧が1点ある【図3-6】。両側縁に粗い剥離を加え、刃部だけを研磨した局部磨製石斧である。一端を欠損する。現存長8.9cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重量97.5g。玉湯村内で出土したことしかわからない。

次に、叩き石が2点ある。

一つは、「大字林村字根尾越」での明治42年（1909）採集資料である【図4-4】。長楕円形をした大型品で、両端に敲打痕がある。長さ20cm、直径7.6×8.5cm、重量1960g。根尾地区は松江市玉湯町にあり、玉湯川と本郷川との中間にあつて宍道湖に面する。「根尾越」の字名はわからなかったが、現在の玉湯中学校南の谷を上がって林村地区へ至る道の峠のあたりであろうか。

もう一つは、明治27年（1894）採集の「湯町村大字林（林村）」のもの【図4-5】。棒状の叩き石で、両端にわずかに敲打痕がある。長さ12.5cm、直径3.8×2.3cm、重量170g。注記の字名は「なかぐら」と読めそうなので、小字「中倉」あるいは「中蔵」であろう¹⁶。林村地区の本郷川右岸の小字名で、近傍に中倉古墳群があるが、集落遺跡は未確認である。

「林村」採集の石錘1点がある【図5-5】。砂岩質の小礫を加工した小型の石錘である¹⁷。長さ6.5cm、幅4.8cm、重量80g。

5点目は、「玉湯村大字玉造」と注記された砥石である【図5-14】¹⁸。直方体をした硬質の石材で、1面には長軸に平行する9条の研ぎ溝がある。反対の面には3条が認められる。短辺側の側面にも擦痕が確認できる。長さ12cm、幅8.5cm、厚さ3.6cm、重量720g。

乃木村 乃木村¹⁹（松江市乃木地区）関係の石器は、「千代衛目録」と「大谷ノート」を総合すると40点があったようだ。そのうちの26点が現存する。うち5点は自然礫または石器とは思えないので、掲載しなかった。

明治25年（1892）から大正6年（1917）の約25年間にわたる採集品で、一つだけ昭和11年（1936）の収集品がある。これは、コレクション全体でも最も新しい年次の資料である。

採集地域は、松江市乃木・浜乃木・上乃木・乃木福富・乃白の各地区に及んでいる。



図1 松江市乃木地区周辺地図

山居川右岸（北岸）の丘陵地に所在する字「^{あてぬき}当貫」「西ノ原」「宇賀」などが多いが、「当貫」の東に近接する「京塚」「坪根」のほか、山居川左岸（南岸）で乃木二子塚古墳東方の字「矢ノ原」や「水無し（水無尻）」のものもある。ほとんどの地点は『松江市遺跡地図』に遺跡として記載がなされていない²⁰。

乃木地区から出土した石器は15点を掲載した。磨製石斧が2点ある【図2-2・4】。

図2-2は、「西原」（現松江市上乃木3丁目周辺）で採集された刃部の破片である。刃部に欠損がある。現存長8.2cm、幅5.6cm、厚さ4.3cm、重量290gである。

図2-4も刃部を含む磨製石斧破片。字「宇賀」（現上乃木1丁目周辺）出土²¹。現存長11.0cm、幅6.2cm、厚さ4.1cm、重量398gである。

打製石斧は3点ある【図3-7～9】。

図3-7は字「宇賀」（現上乃木1丁目周辺）での1913年採集石器。やや軟い砂岩質の扁平な礫を素材にし、周縁を打ち欠く。現存長10.6cm、幅6.4cm、厚さ3.1cm、重量314g。

図3-8はバチ形をした大型の打製石斧。粗雑な作りで、表裏と側面の一部に自然面を残す。全長21.5cm、幅7.6cm、厚さ2.7cm、重量520g。採集地点は不明である。

図3-9は「西乃原」（現上乃木3丁目周辺）採集の打製石斧である。周縁に比較的細かな剥離を加えて撥形平面に作っている。刃部を一部欠損する。現存長14.8cm、幅10.4cm、厚さ1.6cm、重量356g。

叩き石は6点【図4-6～9、図5-1・2】を掲載した。

図4-6はチャート質の棒状の叩き石で、一方の端に打撃による剥離痕がある。全長17.3cm、幅4.9cm、厚さ2.9cm、重量317g。「当貫」(現上乃木4丁目東部)での採集資料である。

図4-7は砂岩質の叩き石と思しき資料。円柱状で両端は丸い。全長12.3cm、直径5.3×4.0cm、重量330g。字「丸山」は字「西原」の南側、山居川右岸の字名(現上乃木4丁目)。

図4-8も砂岩質の叩き石。厚みのある小判形をしており、表裏と側縁に敲打痕跡がある。長さ13.0cm、幅9.7cm、厚さ5.8cm、重量1220g。出土地点の字「水無尻」は、字「丸山」南方の丘陵地である(現上乃木9・10丁目)。

図4-9はやや不整形な叩き石。現存長12.9cm、幅8.4cm、厚さ5.9cm、重量620g。字「西ノ原」の採集品である。

図5-1は、一端を欠損した俵形の叩き石。長さ11.8cm、幅7cm、厚さ5.3cm、重量580g。字「京塚」(現上乃木3丁目)での採集品。

図5-2は、中央部がややくびれた俵形の叩き石。現在の県立松江南高校周辺での採集品と推定される²²。一端を欠損するが、端部には敲打痕跡がある。現存長12cm、幅7.0cm、厚さ4.7cm、重量590g。

乃木地区採集の砥石は3点ある。

図5-12は、砂岩質の扁平な砥石。7.0×5.2cmほどで、厚さ1.6cm、重量48g。「西ノ原」(現上乃木3丁目周辺)採集品。

図5-13は、凸字形の石製品である。全面に擦痕があるが、いちばん厚みのある底面が最も磨り減る。全長11cm、最大幅7.3cm、上端幅4.4cm、厚さ2.8cm、重量300g。字「坪根」(現上乃木4丁目)の採集品である。

図5-15は台形をした砥石。石質は粗い。表裏と側面に使用痕がある。長さ12.1cm、幅7.6cm、厚さ4.2cm、重量567g。字「宇賀」の採集資料で、明治41年(1908)3月8日と9日に採集された破片が接合している。

福富地区での採集資料は6点あったようだが、磨製石斧5点のうち2点は現存せず、破片3点が残っている。

図2-3は、刃幅5cmほどの石斧。全体に丁寧に研磨され、刃部には使用にともなう破損がある。現存長7.8cm、幅6.0cm、厚さ4cm弱、重量215g。

図2-5は、乳棒状の磨製石斧。側刃を欠損する。現存長13.4cm、現存幅3.8cm、厚さ3.5cm、重量290g。

図2-6は、基部の尖った石斧破片。破面には、敲打痕がある。現存長11.6cm、現存幅6.4cm、厚さ4.1cm、重量422g。

これら3点の詳細な出土地は不明だが、「千代衛目録」記載の2点の石斧出土地として、字「乗越」「曲り木」が確認できる。「曲り木」は福富育種場(のち島根縣農事試験場、後述)が所在したところである²³。

また、「神立遺跡 明治四十年五月十三日採収」と注記された資料がある。これは神立遺跡(松江市乃木福富町、『松江市遺跡地図』遺跡番号D012)出土と思われるが、『松江市遺跡地図』に示された神立遺跡は、字「腰前」にあり、字「曲り木」の北東にある字「神立」と場所が違う(乃木郷土誌編纂委1991)。本資料に出土字名の記載はない。沓形をした板状の石で周縁部には明瞭な剥離痕は認めがたい。自然礫とみて掲載しなかった。

乃白地区では採集資料3点のうち2点を確認できた。

図2-7は、石斧破片。基部は尖る。現存長8.5cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重量190g。採集地の「御田原」は「ミダハラ」と読めるから、福富地区との境にある字「弥陀原」であろう²⁴。

図2-8も石斧基部の破片。現存長7cm、現存幅4.5cm、厚さ3.1cm、重量120g。

図2-5～8の石斧は、基部が尖った乳棒状で、縄紋時代のものの可能性が高いだろう。

「千代衛目録」に「大字野白西山」「弁慶が釜古墳」北方での石器採集記録がある。『島根縣史 四』（野津1924）には八束郡内の古墳の一つとして、「乃木村大字福富字西山 發掘 俗に瓣慶ヶ釜と稱す」が掲載されている。字「西山」は乃白地区の南西隅に位置するが、『松江市遺跡地図』に同名の古墳は記載されていない。**大庭村** 磨製石斧1点があったようだが、所在不明である。また、六所神社裏採集の資料は掲載していない。

津田村 旧津田村関係では、大字「東津田」出土の石器3点（叩き石1点、磨製石斧1点）と大字「古志原」出土の磨製石斧1点、そして打製石斧2点が現存している【**図2-9～11, 3-10, 4-1, 5-3**】。

図2-9は、1918年に字「神守畷」で採集された磨製石斧破片である。わずかに刃部が残っており、表面はよく磨かれている。現存長10.0cm、厚さ4.0cm、重量240g。この石斧は、「大谷ノート」に「高日神社前」と記録されているように、津田村の耕地整理²⁵で見つかったものであり、『松江市遺跡地図』（松江市教委1991）に鷹日神社前遺跡（遺跡番号E005、石斧出土）とされているものであろう。

図2-10は、弥生時代の太型蛤刃石斧の刃部破片。石材の目が長軸方向に走る。現存長5.5cm、幅5.8cm、厚さ4.2cm、重量190g。「櫛岡畦畔」とあるもので、馬橋川下流域の櫛岡遺跡（松江市東津田町）ないし石台遺跡出土の可能性はある。

図2-11は、弥生時代の太型蛤刃石斧の基部破片。現存長12.4cm、幅6.4cm、厚さ4.8cm、重量650g。この磨製石斧に関しては、「山本清考古資料」（A-35-16）に出土地点の地図があり、山代神社参道が旧師団街道（現国道432号線）から分かれた北西の道路北側、旧練兵場へ至る路の脇での採集とわかる。この地点は周知の遺跡とはなっていない。

これら以外に「千代衛目録」に大字「古志原」の「山代神社前馬場」採集の磨製石斧がある。『松江市遺跡地図』は、その周辺での遺跡を記載していない。

打製石斧は2点ある。ともに古志原出土。

図3-10は、ほぼ全形を留める撥形の打製石斧。全長12.6cm、幅6.5cm、厚さ1.9cm、重量224g。

図4-1は、刃部側を欠損した打製石斧。現存長10.8cm、現存幅7.6cm、厚さ2.6cm、重量250g。

叩き石が1点ある【**図5-3**】。楕円形平面をしており、表裏と側面に敲打痕がある。全長12.7cm、幅7.8cm、厚さ4.3cm、重量570g。

なお、柴田常恵が「八束郡津田村字古志原磨石斧、打石斧」とあげるもの（柴田1910、370頁）は、上記の石斧のどれかだろう。

川津村ほか 旧川津村²⁶ほか松江市街北東地域出土の石器はどれも現存していない。

「千代衛目録」石第1号は、明治23年（1890年）採集の「西川津村尾茂祖谷」出土の磨製石斧である。この石器は『新修松江市誌』（同編纂委1962 83頁）の「松江市内発見縄文式石斧」に掲載されたもの（同頁4）であり、山本先生は「川津、嵩山西麓」（山本資料A-35-8）とされている。渡邊貞幸先生のご教示によれば、「尾茂祖谷」は現在の川原町の集落（旧川原村）に西隣する谷に位置する字名だが、ここは旧西川津村ではなく、明治23年当時、持田村大字川原に属していた。ただし、この場所は「東川津村」に隣接するので、「西川津村」との誤解を生んだのではないかと推測される。なお、この石器は「大谷ノート」にも記載があってわざわざ「研磨美」とされているので、所在不明が残念である。「山本清考古資料」の図を掲げる【**図3-4**】。

この他、「大谷ノート」に「松江楽山附近」の打製石器が記録されているが、これも所在不明。

講武村 佐太講武貝塚（松江市鹿島町佐陀宮内・名分）出土の石錘が2点ある【図5-6・7】。

図5-6は、チャート質の扁平な円礫を素材とした石錘。両端を打ち欠いていたと思われるが、一方は剥離面が新しい。全長・幅7.3cm、厚さ3.2cm、重量242g。「山本清考古資料」（A-35-29）に「木村嘉造の畑出土」とある。

図5-7は、チャート質の棒状の円礫を加工した石錘である。全長8.2cm、幅3.1cm、厚さ1.8cm、重量67.5g。

磨製石斧1点は所在不明である。

千酌村 「千酌」の紙ラベルが貼られた資料1点があるが、おそらく自然礫である。この他、「千代衛目録」に千酌の「尔佐神社北後路傍」採集の磨製石斧が記載されるが、現存しない。『増補改訂 島根県遺跡地図』Ⅰ（島根県教委2003）の爾佐神社脇遺跡（松江市千酌町）ないし千酌神社裏遺跡に関わるものであろうか。

片江村 大正9年（1920）採集の石器がある。採集地「菅浦」とあるが「菅浦」であろう。『増補改訂 島根県遺跡地図』Ⅰ（島根県教委2003）に記載の菅浦遺跡（I31、石斧）出土か²⁷。

c 松江市

明治22年（1889）市制施行の旧市街地域であるため、資料数は多くない。

出色の資料として完形の磨製石斧がある【図3-1】。「松江市東茶町と西京橋交差点/五六間東」で採集された石斧であり、『新修 松江市誌』（松江市誌編纂委1962）に山本清先生が紹介されたものである（同書86頁1）。ここで「茶町、須衛都久神社附近」とだけ記述されたため、『松江市遺跡地図』（松江市教委1991）は、これを須衛都久神社境内出土としているが、不正確。「山本清考古資料」（A-35-10）には石斧の実測図とともに出土地の略図が付されており、神社から約100m北東の國暉酒造前あたりでの採集とわかる。これは注記とも矛盾しない²⁸。

d 飯石郡・大原郡・仁多郡

出雲山間部の3郡の出土石器は、各々1点があったようだが、いずれも残っていない。

「大谷ノート」に「飯石郡波多村／関」と記録された石器は、「山本清考古資料」（A-35-36）によれば、磨製石斧の刃部破片で、幅5.8cm、残存長6.5cm、厚さ3.0cmの大きさ。「灰青色、黒紺色の斑を交え美しく研」との注記がある。

出土地は、現在の雲南市掛合町波多である。

旧大原郡域の資料としては、「千代衛目録」に「日登村大字東日登」出土石鏃の記載がある。現在の雲南市木次町日登。「山本清考古資料」（A-35-51）に略図があるものの、これには「散逸して現存せず」とある。もちろん現存しない。

旧仁多郡域の石器に、「仁多郡横田 横田川」の石斧があった（「山本清考古資料」A-35-35）。

e 安濃郡・邇摩郡

旧石見国域採集の石器は3点ある。いずれも明治45年（大正元・1912）収集の資料である。

邇摩郡内の資料に、やや細身の磨製石斧破片1点がある【図3-3】。「ニマ郡久利村／大字松代／字平野原」（大田市久利町松代）と記され、現存長8.9cm、幅5.2cm、厚さ3.3cm、重量201g。おそらく長谷川愛雄氏の収集品だろう²⁹。

安濃郡内出土の石器は2点ある。

図3-5は細身の磨製石斧。断面ほぼ円形で基部は細い。縄紋時代の石斧だろう。全長15cm、幅5.1cm、厚さ3.7cm、重量450g。

図5-9は石錘。全長6.3cm、幅4.3cm、厚さ1.4cm、重量70g。

ともに明治45年（1912）「川合村大字南」（大田市川合町）での収集品だが、『島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』（島根県教委1992）には、当該地域に縄文・弥生時代の遺跡は掲載されていない³⁰。

f 隠岐・知夫郡

「長谷川コレクション」の隠岐島の資料は、土器を含め明治41年(1908)採集に限られ、しかも島前の資料だけである。おそらくこの年に島へ渡られた時の採集資料なのであろう。自然礫とみられるので割愛した。

g その他

宮崎県(日向国児湯郡・西臼杵郡)と岐阜県(美濃国武儀郡)で見つかった石斧や石鏃があったらしいが、現存しない。現存するのは、「日向」の貼紙のある石錘1点のみ[図5-8]。「千代衛目録」記載の宮崎県や福岡県の資料が、明治28年(1895)に集中するのは、千家氏との九州布教旅行がこの前後だったからだろうか。

また、「山本資料」(A-35-51)には、「1. 佐太村発掘青 大形勾玉/2. 津田村賣豆紀発掘 斑勾玉/3. 塩冶村築山発掘 赤勾玉/4. 大庭村黒田畦発掘 薄色勾玉」4点、および「石鏃/1. 庄原村岡ノ目」が記録されているが、「散逸して現存せず」とされる。

「佐太村」(松江市鹿島町)の「大形勾玉」は前半期の古墳出土品か。「塩冶村築山」は、上塩冶築山古墳か築山遺跡の古墳群(ともに出雲市上塩冶町)に関係するものだったのだろう。

h 小 結

以上、「長谷川コレクション」の石器45点を図示した。このほかに、自然礫と判断して図を掲載しなかった資料が10点あるので、合計55点の石器等が現存する。石器については、その概要と出土遺跡あるいは出土地の推定などをおこなったが、いずれも縄紋土器や弥生土器が合わせて採集されているわけではないので、その時代・時期については詳しくは述べなかった。

土器および瓦についても、引き続き整理を進めてその全貌を示したい。(続く)

註

¹『意宇郡神社明細帳』には、乃木村当貫にあった稲荷神社が明治7年(1874)に遷座した先を「長谷川千則ノ私邸」とする。これが長谷川家の居宅であろう。ここは、後に傷痍軍人島根療養所建設地となったようだから、現在の国立病院機構松江病院(もと国立療養所松江病院、松江市上乃木町5丁目)附近だったのであろう。

² 初版の奥付によれば、

明治32年2月21日印刷、明治32年2月28日発行、著作・発行は長谷川千則氏と長谷川千代衛氏(島根縣八束郡乃木村大字乃木230番地屋敷)、佐々鶴城氏校閲、題字は国造千家尊紀氏、印刷は報光社(島根縣松江市殿町50番地)。

「山本資料」には「三版まで出版」とあるが、国立国会図書館のデジタルアーカイブ書誌情報によれば、明治40年に増補訂正第4版が出されている。佐々鶴城については(梶谷1974a)を参照。

³ これは「千代衛目録」(後述)にある「石 第一号」で明治23年(1890)年4月5日の発見である。

「山本資料」には「明治10年代より考古に興味を起したるか(今90に近い人が15才の時という)」とあって、山本先生の計算式がメモ書きされており、「その人90才として明治13」と注記されている。ただ、これだと愛雄氏は明治元年前後の出生となり、時に千代衛氏13歳前後である。愛雄氏は明治43年3月26日に某学校(師範学校か?)を卒業されたことが石器の注記によってわかるが、当時、年齢40歳を越えて学校を卒業することはないだろう。愛雄氏の生まれは明治8年(1876)頃で、明治23年の石器発見が千代衛氏とともに愛雄氏の考古学への傾倒を導いた、と推測しておく。これなら、愛雄氏出生時に千代衛氏は22歳くらいで納得しやすい。

⁴ ゼラ紙は「島根縣視聴覚ライブラリー 映画上映報告」の用紙である。

⁵ 行政区分については、明治末年(1912年)の市郡町村名による。旧出雲国は、明治22年(1889)の行政改革により、1市10郡(5町135村)の構成となった。その後、明治29年(1896)に簸川郡と八束郡の成立などがあり、1912年時点では、1市6郡(7町131村)であった。

⁶ 出雲西部の宍道湖西岸地域は、奈良時代以来、神門郡・出雲郡・楯縫郡の3郡で構成されていた。明治維新後の明治4年(1871)、全国的に「区制」が導入されたため、島根県内では、神門郡が「第八大区」、出雲郡が「第九大区」、楯縫郡が「第十大区」に改称されたものの、この「区制」は明治11年(1878)の郡区町村編成法で廃止された。翌明治12

年(1879)1月には、神門郡には1人の郡長が、出雲郡と楯縫郡には兼任郡長が置かれて各郡役所が設置されたが、同年11月の県会決議によって出雲・楯縫郡役所は神門郡役所に合併となった。この時には2人の郡長が維持されたが、まもなく神門郡長が出雲・楯縫郡長を兼務するに至った。このような状況下、3郡合併の機運が醸成され、ついに明治29年(1896)に3郡は合併して「簸川郡」が誕生した。

簸川郡での採集資料(石器・土器とも)について注目されるのは、資料の中の明治36年(1903)の採集品3点には「簸川郡」と記されているのに対して、明治37年～40年(1904～1907)の採集品で郡名を示した10点中9点には「ヒノ川郡」と表記されていることだ。これは単なる憶測にすぎないかもしれないが、明治37年(1904)元旦の山陰新聞に掲載された村上壽夫の一文「出雲、石見の郡名に就いて」が影響したのではないかと推測される。

村上壽夫(号・琴屋)は、文久元年(1861)生まれ。松江市奥谷の人で、生来詩才に富み、旧松江藩士・平賀静遠に師事して漢詩・和歌・俳句等の達人とされた。のちに官界に入るや、八束郡長・簸川郡長や隠岐島司を歴任した。かたわらで「剪淞吟社」の重鎮として『島根評論』に「島根詩壇」を連載するなど、漢詩界に活躍した。退官後は、東京で松平家令として仕えた。昭和7年(1932)没、享年72才(伊藤編1980などによる)。

さて、村上壽夫は明治37年元旦の寄稿で、自らが八束郡長となったことの因縁は、明治23年(1890)5・6月頃に府縣制郡制施行委員会の県委員の一人として郡の合併について協議した時に、そこで、意宇郡・島根郡・秋鹿郡を合した新郡の名称として「八束郡」を提唱したことにある、と回顧的に語っている。「八束郡」はもちろん、八束水臣津野命にちなむ。

さらにこの時、ほかの2・3郡を合併した新郡の名称について、仁多郡+大原郡=簸上(ひのかみ)郡、出雲郡+楯縫郡+神門郡=簸下(ひのしも)郡、を提案したという。簸伊川の上流域と下流域、つまり、簸川上(ひのかわかみ)と簸川下(ひのかわしも)に基づく名称である。

後者の「簸下郡」は、一時、大国主命にこと寄せた「大国郡」と定まりかけたが、最後には「簸川郡」に落ち着いたという。村上は「簸上・簸下郡」の経緯も踏まえて、「簸川郡」を「ひのかわぐん」と呼ぶべきと主張した。そして「本家本元の簸川郡(ヒノカハゲン)の人まで「ヒカハ」と呼んで居るのは、聞き苦しいのみならず、元來名を亂ると云ふ事は、輕々に看過すべき事では無いのである。」と、この稿を結んでいる。

わたしは、この記事を読んだ長谷川千代衛氏が触発されて、「ヒノ川郡」と注記方法を変更したのではないかと想像している。

なお、戦前に陸軍陸地測量部が発行した25,000分の1地形図「出雲今市」「大社」(1918年発行)「平田」(1936年発行)を見ると、郡名の「簸」に「ヒノ」のルビがふつてある。

蛇足だが、平成23年(2011)10月に簸川郡斐川町は出雲市と合併して「簸川郡」の名称は消えた。しかし、合併後の新出雲市の範囲は、ほぼ明治29年当時の簸川郡の境域にはかならない。簸川郡復活？

⁷「文庫」は現在、荒垣内の東北隅にあるが、これは大正3年(1914)に移されたもので、それまでは荒垣の西北隅、現在、彰古館が建つ場所附近にあった(西山編2003, 34・35頁)。資料の採集年次は不明だが、明治43年(1910)までの発見と推断でき、地形的に境内地の東北には遺跡を想定し難いから、注記にいう「文庫」は旧位置を指すと判断した。

現彰古館東北で2001年におこなわれた発掘調査では、縄紋時代晩期末の土器が出土している(石原2004)。

⁸ 鹿蔵山遺跡は大社小学校敷地(大社町杵築南字鹿蔵山(しかくらやま))を中心とする遺跡で、1935年に小村尚司氏によって発見された(小村1982)。

「Ⅱ土器編」でも述べるように、大社小学校の南にある現大社中学校敷地(杵築南字鹿城山(かしらやま)、旧県立第三中学校のち旧杵築中学校のち県立大社高校の敷地)周辺では、すでに明治36年(1903)には須恵器が採集されている。これは、明治34年(1901)7月に開始された、旧制中学校移転にともなう造成工事(翌年4月に移転、明治36年(1903)11月に開校式挙行(大社町史編纂委2008, 588～592頁))で出土した資料と推定される。二つの校地は字名が違う(梶谷1974b)が、現状では両者あわせて鹿蔵山遺跡と呼称している(大社町史編纂委2002, 302～313頁)(石原・露梨2005)。

⁹ 関和彦氏によると、朝山五山の一つ「冠山」を横山永福『出雲国風土記考』は「宇比多伎山御社の南に在る岩にて里人はコウモリ岩と云」にあてているが(関1999)、この岩のことであろう。加藤義成が「土地の人は冠岩と呼んでいる」と述べる岩のようである(加藤1962)。「宇比多伎御社」は現在の朝山神社である。

¹⁰ 国鉄大社線の開業にともない、出雲大社勢溜りと大社駅とを結んだ直線道路。大正3年(1914)開通。翌年には現行の「神門通り」と改称された(大社町史編纂委2008, 690頁)。

¹¹ 『出雲市遺跡地図』(出雲市教委1993)によれば、出雲市知井宮町間谷地内には、①間谷遺跡(遺跡番

号 N42), ②間谷西遺跡 (N46), ③古垣内遺跡 (N47) が記載される。②③は「消滅」。①については、「所在不明」とあって地図にドットがない。遺物として「石斧」があがり、参考文献に (赤澤ほか1983) が掲出されるが、同書には須恵器の出土を記すのみで、石斧出土の記述はない。

2006年には間谷東遺跡, 2007年には間谷西Ⅱ遺跡の調査がおこなわれた。いずれでも石斧は出土していない。ただし, 間谷西2号墳の周辺からは石斧や石錘が出土した (今岡2009)。

¹² 「山本資料」によれば, 昭和14年 (1939) に松江市雑賀町に引越しされたい。これは傷痍軍人島根療養所の設立年にあたる。

¹³ 『島根縣史 一』「島根縣内發見の石器類」地名表 (野津1921, 34~38頁) によると, 八束郡内の磨製石斧發見地12箇所のうち9箇所が, 「長谷川コレクション」に関わる。

¹⁴ 明治38年 (1905), 八束郡玉造村と湯町村が合併して成立。

¹⁵ 「穴居遺蹟」とあるのは, 横穴墓を示す。

¹⁶ 松江市玉湯町の字名に関しては, 松江市立玉湯資料館三宅博士氏と松江市教育委員会片岡詩子氏の教示を得た。

¹⁷ これらの叩き石と石錘は, 柴田常恵が「玉湯村字林 磨石斧, 錘石」としたものに相当するのであろう (柴田1910)。

¹⁸ 「山本資料」(A-35-6-1) に「舟形棺ある藪の附近」との注記がある。このほか「大谷ノート」に「他に玉砥石三個?」とあるがこれらは所在不明。

¹⁹ 乃木村大字乃木・上乃木・福富・乃白各地区の字名は, 『乃木郷土誌』所載資料10「明治初期の乃木地域地図」を参照した。なお, 『皇国地誌』(1877年) には乃木村字名として, 「香の木, 矢の原, 友田, 新町, 半原, 江洲谷, 浜, 宇賀, 後廻, 当貫, 高原, 鍛冶屋」の12箇所があがっている。

²⁰ 宇賀Ⅰ遺跡と宇賀Ⅱ遺跡は, 字「後廻」に位置する。「千代衛目録」に「字當貫小字後迫」「字後迫」とあるものがある。『松江市遺跡地図』(松江市教委1991) のD030 (散布地) は字「大空」「坪根」にあたるだろう。

²¹ これは, 柴田常恵が「乃木村字乃木小字宇賀 磨石斧」とした資料であろう (柴田1910, 370頁)。

²² 「字矢原境下沢路上」と注記されているので, 「八重垣道」(「乃木村大字乃木字「大空」長門道分れより, 同村大字乃木字「矢ノ原」にて大庭村大字大庭に接するまで」(乃木郷土誌編纂委1991, 272頁)) 路上のことなので, 現在の県立松江南高等学校周辺からその北側あたりと思われる。『松江市遺跡地図』(松江市教委1991) には, 乃木二子塚古墳に近接し

て「下沢遺跡」(D001) があるが, これは字「二子塚」「茶山」に位置し, 「八重垣道」には接しない。

²³ 柴田常恵が「同 (八束) 郡同 (乃木) 村字福富 (農林校敷地)」と記録したものか (柴田1910)。

²⁴ 柴田常恵が「同 (八束) 郡同 (乃木) 村字乃白小字御田原 磨石斧」と挙げたものであろう (柴田1910)。

²⁵ 旧津田村の耕地整理は, 明治43年 (1910) 八束郡長熊谷頼太郎からの郡令で指示された村は制定過程で計画立案され, 大正8年 (1919) 度に完了した (津田・古志原郷土誌執筆専門委員会1982)。

²⁶ 川津村は明治36年 (1903) に, 西川津村と東川津村が合併して設立された。

²⁷ ただし「山本資料」(A-35-30) には須義神社の南側に出土地マークが記されている。「路傍の石屑を積んだなか」とある。

²⁸ 注記には採集年次が記されていないが, 「水道鉄管工事の際／上げられていた」とあるから, 明治28年 (1895) 計画され, 大正7年 (1918) に通水した松江市水道事業に関連する出土品とみてよい。「山本清考古資料」には「大正」とあり, 「このあたりは埋れた土と思われるので他から運ばれて埋っていたものと思うとのこと」という長谷川愛雄氏の言が記録されている。

1927年8月発行「最新松江市全圖」(松江市立図書館蔵) を見ても, 須衛都久神社境内地は穴道湖岸に面しており, ここが先史時代の遺跡とは信じ難い。

²⁹ この資料の注記には, 「児童家庭訪問／帰途」とある。『久利小学校校史』(同編集委1980) の在職教員名簿に, 長谷川愛雄氏の名は見えないが, 『波根小学校百年史』(同編集委員会1976) によれば, 長谷川愛雄氏は明治44年 (1911) に波根小学校に在籍されていた。住所は「八束・乃木」, ただし「休職」だった (同書88~92頁)。愛雄氏は, 明治43年3月26日に某校を卒業されたことが「乃木西ノ原」採集石器の注記でわかる。これが島根県師範学校 (松江市外中原町) とすると, 卒業翌年の赴任地である。その後, 大正2・3年度 (1913~15) は八束郡揖屋小学校, 大正4~7年度 (1915~19) には津田小学校に奉職されていた。『津田小学校教育百年史』(津田小百年記念事業実行委・津田小1975) 掲載の「津田小学校旧職員名簿」(22~24頁) および松江市教委・松本浩氏のご教示による。

なお, 明治時代末年に家庭訪問が行われていたことがわかる点では, 教育史的にも興味深い資料であると思う。

³⁰ ただしこの2つは, 『島根縣史 一』(野津1921) の「島根縣内發見の石器類」地名表 (34~38頁) には掲載されている。

参考文献

- 赤澤秀則ほか 1983『出雲平野の集落遺跡Ⅰ』古代の出雲を考える3, 出雲考古学研究会。
- 石原 聡 2004「彰古館北の調査」『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会, 227～264頁。
- 石原 聡・露梨靖子 2005『鹿蔵山遺跡』大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書, 大社町教育委員会。
- 出雲市教育委員会 1956『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告, 第1集。
- 出雲市教育委員会 1993『出雲市遺跡地図』。
- 伊藤菊之輔編 1980『島根県人名事典』国書刊行会。
- 今岡一三 2009『御崎谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷西Ⅱ遺跡 間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ, 島根県教育委員会。
- 小村尚司 1982「大社考古学の覚書」『大社の史話』第42号, 大社史話会, 16～19頁。
- 梶谷 実 1974a「佐々鶴城伝」『大社の史話』第2号, 大社史話会, 7頁。
- 梶谷 実 1974b「大社の小字名」『大社の史話』日御碕特輯号, 大社史話会, 15・16頁。
- 加藤義成 1962『修訂出雲国風土記参究』今井書店(改訂3版1981年発行)。
- 久利小学校史編集委員会 1980『久利小学校史』久利小学校。
- 柴田常恵 1910「出雲雜記(一)」『東京人類學會雜誌』292号, 東京人類學會, 370～372頁。
- 島根県教育委員会 1992『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』。
- 島根県教育委員会 2003『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)』。
- 関 和彦 1999『『出雲国風土記』註論 その四 神門郡条』『古代文化研究』第7号, 島根県古代文化センター, 1～98頁。
- 大社町史編纂委員会 2002『大社町史 史料編(民俗・考古資料)』大社町。
- 大社町史編纂委員会 2008『大社町史 中巻』出雲市。
- 立原久綱編 1933『郷土資料 島根叢書』第2篇, 島根縣教育會。
- 津田・古志原郷土誌執筆専門委員会 1982『津田・古志原郷土誌』津田・古志原郷土誌編集委員会。
- 津田小学校百年記念事業実行委員会・松江市立津田小学校 1975『津田小学校教育百年史』松江市立津田小学校。
- 中島栄一 1983「石冠・土冠」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣出版株式会社, 149～169頁(第2版, 1995発行)。
- 西山和宏編 2003『出雲大社 社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会。
- 乃木郷土誌編纂委員会 1991『乃木郷土誌』松江市乃木公民館。
- 野津左馬之助 1921『島根縣史 一』先史時代・神代, 島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 野津左馬之助 1924『島根縣史 四』古墳, 島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 花谷 浩 2011「瓦礫陶拾遺 ー明治大正期のある好古家の遺産」『島根考古学会誌』第28集, 島根考古学会, 103～108頁。
- 波根小学校百年史編集委員会 1976『波根小学校百年史』大田市立波根小学校。
- 歩兵第六十三聯隊史編纂委員会 1974『歩兵第六十三聯隊史』同刊行委員会。
- 松江市誌編纂委員会 1962『新修松江市誌』松江市。
- 松江市教育委員会 1991『松江市遺跡地図』。
- 村上壽夫 1903「出雲, 石見の郡名について」『山陰新聞』明治36年1月1日号(のち, 奥原碧雲編1926『八束郡誌』, および, 立原久綱編1933『郷土資料 島根叢書』第2篇, 島根縣教育會, 9～12頁, に再録)。
- 山本 清 1995『古代出雲の考古学 ー遺跡と歩んだ70年』ハーベスト出版。

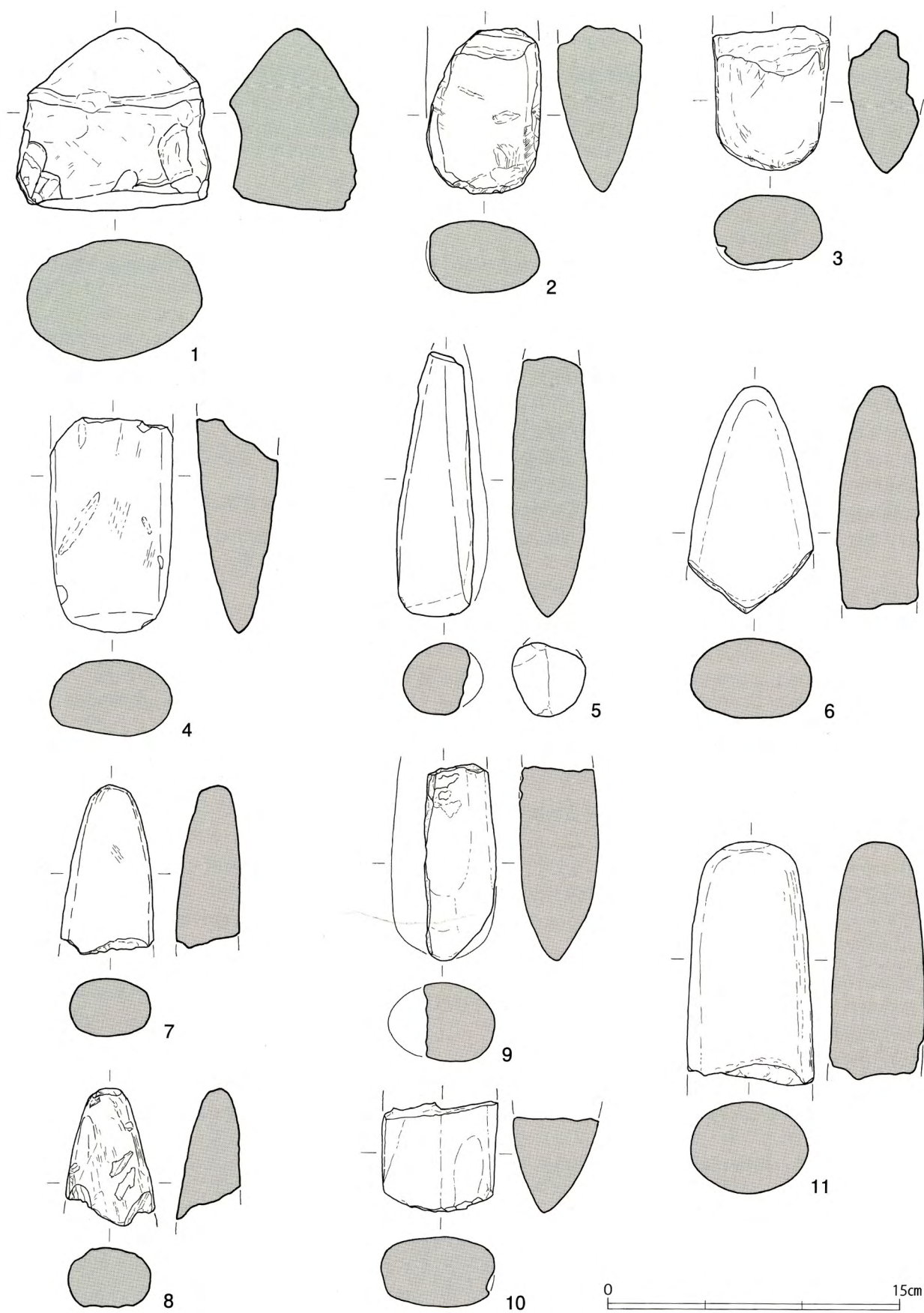


図2 磨製石斧など (1:3)

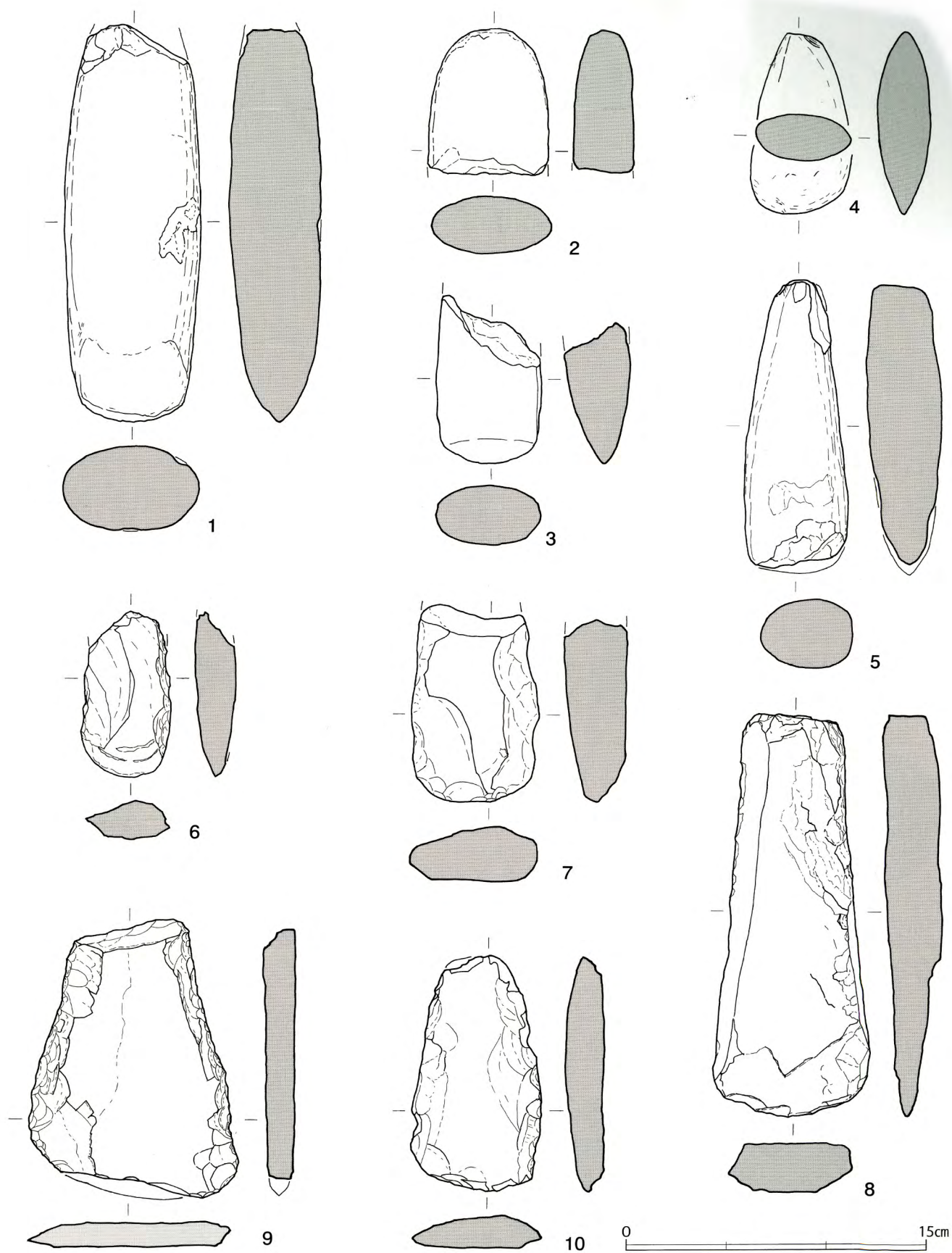


図3 磨製石斧と打製石斧 (1:3)

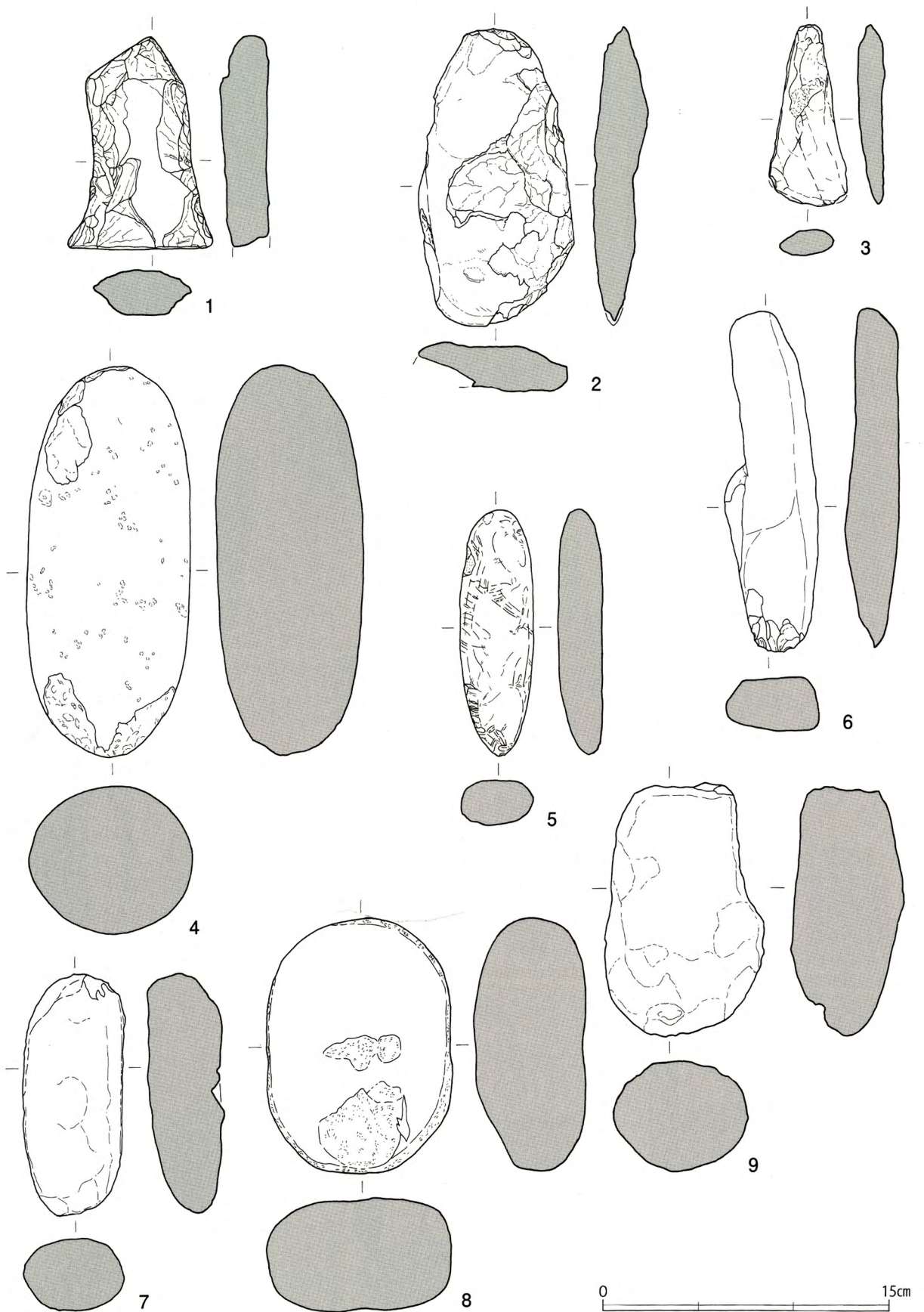


図4 打製石斧と叩き石 (1:3)



図5 叩き石・石錘・砥石 (1:3)

長谷川千代衛・愛雄氏収集石器一覧

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	挿図番号
鏡川郡							
	杵築町						
		【杵築】 [杵築/大社/文庫北方/谷?]	石冠	○	1910以前	「大谷」9頁	2-1
		杵築 【 】 [杵築鹿倉山][来待石]	砥石	○		「大谷」17頁	5-10
		『杵ツキ(墨書) 大社町(ナカグラ山?) 愛雄中学生時代?』	打製石斧?	×		「山本」A-35-34	
		[大社直線道採集]	磨製石斧破片	×		「大谷」24頁, 「山本」A-35-33	
	知井宮村						
		[知井宮村字間合ニテ同村人/奥井新市採集/時ハ明治卅六年七月二十日也 閃緑岩]	磨製石斧破片	×	1903	「大谷」20頁, 「山本」A-35-32	
	朝山村						
		ヒノ川郡/上朝山ヒイ□(源カ)/コモリ穴岩	砥石	○			5-11
八東郡							
	玉湯村						
		八東郡湯町村大字林字なか□□(ぐらカ)/明治□□(廿七カ)年七□(月カ)□(二カ)十九日 【玉湯】	叩き石	○	1894	「大谷」13頁	4-5
		林 【玉湯】 [林?]	石錘	○		「大谷」14頁	5-5
		[八東郡玉湯村大字玉造/他に玉砥石三個?] 『舟形棺ある藪の附近』	筋砥石?	○	1905以降	「大谷」17頁, 「山本」A-35-6	5-14
		四十二年十二月八日/八東郡玉湯村大字玉造/大字林村字根尾越/岩窟ヲ南ニ距ル約壺町ニテ/採取ス 【玉湯】	叩き石	○	1909		4-4
		明治四十二年/十一月廿三日/八東郡玉湯村/大字玉造/字大門/穴居遺蹟下/ニテ採取	自然礫	○	1909		
		【玉湯】	打製石斧	○			3-6
	乃木村						
	乃木・上乃木	八東郡乃木村大字乃木/字丸山 明治廿五年五月/野津仁之助拾得/明治四十二年四月/十八日仁之助氏ヨリ/譲与ヲ受/雲湖	叩き石?	○	1892 (1909)		4-7
		八東郡乃木村乃木/大字乃木當貫/小字カヂヤ/明治三十二年八月	自然礫	○	1899		
		三十四年一月十一日/西ノ原	砥石?	○	1901		5-12
		八東郡乃木村字古乃木/長九郎谷石/発見人八東郡津田村大字古志原/生馬丈一郎/明治參拾四年五月九日/発見	自然礫	○	1901		
		八東郡乃木村大字乃木/字當貫□中下屋敷附近/明治四十年四月四日得	自然礫	○	1907		
		出雲國八東郡乃木村/大字乃木字當貫/レイクワ小路暖/明治四十一年/二月十一日採取	叩き石	○	1908		4-6
		マス子/轉校/ノ件福/畠氏ニ/報告ノ折/字賀 /明治四十一年/三月八日/得	砥石	○	1908		5-15
		字賀神社/損木伐採/奏上ノキ/字賀 /明治四十一年/三月九日得		○			
		明治四十二年/十一月三日採取/八東郡乃木村大字乃木/字水無尻/千代衛/愛雄	叩き石	○	1909		4-8
		明治/四十三年三月廿六日/愛雄卒業奏上祭/日 西ノ原坂路ニテ採/収ス/千代衛/愛雄	叩き石	○	1910		4-9
		大正二年八月十二日/出雲國八東郡乃木村/大字乃木字字賀/穴地蔵道ニテ	打製石斧破片	○	1913	「山本」A-35-17	3-7
		出雲國八東郡/乃木村大字/乃木字字賀/長谷川愛雄採取/大正三年十月/十七日/野代神社大□中得之	自然礫	○	1914		
		八東郡乃木村乃木/西乃原坂下ニテ拾得/大正六年八月廿五日	打製石斧	○	1917	「山本」A-35-19	3-9
		昭和一一、□(四カ)、一七/八東郡乃木村字賀	石器カ疑問	○	1936		
		大正二年十月廿四日/八重垣神社御遷宮ノ日/神社ニ參拜シ帰路ハ/東郡乃木村大字乃木字/上乃木小字矢原境下沢/路上ニ於テ得タリ	叩き石	○	1913	「大谷」10頁, 「山本」A-35-24	5-2
		四十三年六月廿四日/八東郡乃木村/大字乃木字京塚/西ノ畑	叩き石	○	1910	「大谷」13頁	5-1
		[明治三十四年七月二十八日受之/乃木村乃木小字坪根/野津唯次郎邸内(藪内)/石砥様ノモノ]	砥石?	×	1901	「大谷」19頁	
		坪根□ /上乃木 /明治三十八年/五月十一日	砥石	○	1905	「大谷」19頁, 「山本」A-35-3	5-13
		(記なし) [乃木?]	石器?	○		「大谷」12頁	5-4
		[乃木村字西ノ原新縄手 明治四二、一〇、三一]	打製石斧	×	1909	「大谷」15頁, 「山本」A-35-22	

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	挿図番号
乃木・上乃木	乃木・上乃木	八東郡乃木村/大字乃木西原/大正五年/八月壱日	磨製石斧破片	○	1916	「大谷」21頁,「山本」A-35-21	2-2
		【乃□(木)】	打製石斧	○		「大谷」22頁,「山本」A-35-20	3-8
		字賀 【乃木】《乃木》	磨製石斧	○		「大谷」23頁,「山本」A-35-18	2-4
		出雲国八東郡乃木村大字乃木/字堅田路上 /明治廿九年十月十二日収	磨製石斧	×	1896	「目録」石第四号	
		出雲国八東郡乃木村大字乃木字字賀/篠原矩忠宅前路上/明治卅二年四月廿七日収	磨製石斧	×	1899	「目録」石第五号	
		出雲国八東郡乃木村大字乃木字字賀/周藤権市宅下路上字賀神社正遷宮/一周紀念□當る/明治卅三年五月十一日収	磨製石斧	×	1900	「目録」石第八号	
		出雲国八東郡乃木村大字乃木字當貫/小字後迫 周藤嘉右衛門屋敷内露出 /明治三十四年三月十日発見 之ヲ受ク/立会人/嘉右衛門/立石貞太郎	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十号	
		出雲国八東郡乃木村大字乃木小字坪根 野津唯次郎邸内/三十四年七月十八日受之	砥石	×	1900	「目録」石第十三号	
		出雲国八東郡乃木村大字乃木字後迫/周藤嘉右衛門 父太平発見 /三十四年七月廿四日受之	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十四号・十五号	
		八東郡乃木村大字乃木字字賀(□□(立ノカ)谷)/篠原矩忠宅前路傍ニテ発見/明治三十四年八月廿八日拾収ス	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十六号	
		全郡乃木村大字乃木字大門畷/明治三十八年五月十五日収得ス	磨製石斧	×	1905	「目録」石第十六号	
		八東郡乃木村大字乃木字當貫旧中下屋敷附近明治四十年四月四日得	自然礫?	×	1907	「山本」A-35-23	
		福 富	福 富	福富 《福富》	磨製石斧破片	○	
福富 【福富】《福富》	磨製石斧破片			○		「大谷」21頁,「山本」A-35-27	2-3
福富 【福□(富)】《乃木村/福富》	磨製石斧破片			○		「大谷」24頁,「山本」A-35-25	2-6
出雲国八東郡乃木村大字福富/字乗越 舟木松次郎宅西脇ノ坂/(旧道)/立会人同上 明治卅二年十月廿八日収	磨製石斧			×	1899	「目録」石第七号	
出雲国八東郡乃木村大字福富字/曲ノ木小川畔/ 三十四年七月一日拾収	磨製石斧			×	1900	「目録」石第十二号	
神立遺跡 明治四十年五月十三日採取	自然礫			○	1907		
乃 白	乃 白	乃木/野白	磨製石斧破片	○		「大谷」14頁,「山本」A-35-5	2-8
		[乃木村野白/御田原]	磨製石斧破片	○		「大谷」19頁,「山本」A-35-4	2-7
		出雲国八東郡乃木村大字野白(福富ミエケシ)西山 /俗ニ弁慶カ釜ト称ス/古墳ヨリ北巷丁下路上/明治卅二年十月廿八日収 /立会人同村高橋熊士郎 舟木保市	磨製石斧	×	1899	「目録」石第六号	
大庭村							
		出雲国八東郡大庭村大字大庭字トチダ/路上 明治卅三年九月十一日収 /立会人 中嶋慶太郎氏 /其後青戸明江氏へ贈ル	磨製石斧	×	1900	「目録」石第九号	
		六所神社東 /三十七年九月三日	自然礫	○	1904		
津田村							
		八東郡津田村大字東津田/字神守畷ニテ耕地整理/□□(發カ)掘ニシテ[]/[]四月廿□(九カ)日	叩き石	○		「大谷」11頁,「山本」A-35-12	5-3
		八東郡津田村大字/東津田字神守畷/大正七年三月廿五日/耕地整理ノ際/発掘セリ	磨製石斧破片	○	1918	「大谷」14頁,「山本」A-35-11	2-9
		八東郡津田村大字東/津田樋岡畦畔ニテ/拾得ス /大正八年六月廿八日	磨製石斧破片	○	1919	「大谷」19頁,「山本」A-35-13	2-10
		明治四十一年十二月廿六日/八東郡津田村大字/古志原字二子ニテ /採取ス /愛雄 【古志原】《古志原》	磨製石斧破片	○	1908	「大谷」20頁,「山本」A-35-16	2-11
		出雲国八東郡津田村大字古志原/山代神社前馬場路傍/三十四年三月廿八日収	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十一号	
		【古志原】「古志原」「古志原」	打製石斧	○		「山本」A-35-14	3-10
		【古志原】	打製石斧破片	○		「山本」A-35-15	4-1
持田村							
		出雲国島根郡西川津村/尾茂祖谷 明治廿三年四月五日拾収/立会人 石倉熊市 【磨製石斧、島根郡西川津村尾茂祖谷/明治廿三年四月五日拾収 立会人/石倉熊市/八東郡川津村嶽山麓西麓にて/明治 白灰色/研磨美】	磨製石斧	×	1890	「目録」石一号,「大谷」21頁,「山本」A-35-8	3-4

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	挿図番号
	川津村						
		『松江神社跡の南の方の道路附近 ムカデ橋の先の岡』『附 属校の遠足の時か』	石斧?	×	1896・1897	「山本」A-35-9	
	講武村						
		講武村名分/貝塚 『木村嘉造(畑の地主)より譲受』	石錘	○		「大谷」17頁, 「山本」A-35-29	5-6
		八東郡/講武村/名分/貝塚	石錘	○		「大谷」17頁	5-7
		「講武名分貝塚」 『木村嘉造(畑の地主)より譲受』	磨製石斧	×		「大谷」18頁, 「山本」A-35-29	
	佐太村						
		八東郡佐太村/大字佐太宮内/佐太橋北(西側)/堤上ニテ 拾収ス/四十二年七月十一日/愛雄	磨製石斧破 片	○	1909	「山本」A-35-28	3-2
	千酌村						
		全郡千酌村大字千酌/尔佐神社北後田中路傍/明治三十七 年十二月廿四日拾収ス	磨製石斧	×	1904	「目録」石第十六 号	
		【千酌】	自然礫	○		「山本」A-35-31	
	片江村						
		大正九年十二月廿九日/八東郡/片江村大字管(ママ)浦/ 路上ニ於テ/拾得	打製石斧	○	1920	「大谷」12頁, 「山本」A-35-30	4-2
	不明						
		(記なし) [八東郡?]	石斧?	○		「大谷」15頁	4-3
松江市							
		松江市東茶町と西京橋通り交差点/五六間東にて水道鉄管 工事の際/上げられていた 長谷川愛雄 《氏寄贈》	磨製石斧	○		「大谷」8頁, 「山本」A-35-10	3-1
		「松江楽山附近」	打製石斧?	×		「大谷」23頁	
飯石郡							
	波多村						
		「飯石 波多村/関」	磨製石斧	×		「大谷」17頁, 「山本」A-35-36	
大原郡							
	日登村						
		大原郡日登村大字東日登/小林重義庭上/明治三十七年四 月廿三日朝 収得ス	石鏃	×		「目録」鏃第六号	
仁多郡							
	横田村						
		「仁多郡横田 横田川」	磨製石斧?	×		「山本」A-35-35	
石見国							
邇摩郡							
	久利村						
		児童家庭訪問/帰途 /石見国ニマ郡久利村/大字松代字 平野原二合□ /ニテ之得 /明治四十五年六月一日	磨製石斧破 片	○	1912	「大谷」24頁, 「山本」A-35-39	3-3
安濃郡							
	川合村						
		安濃郡川合村/大字南 学校ノ裏道 /四五、五、三	石錘	○	1912	「大谷」14頁, 「山本」A-35-38	5-9
		安濃郡川合村大字南/古田勘十郎氏ノ裏ノ畑ヨリ/発掘ス /明治四十五年五月四日	磨製石斧	○	1912	「大谷」23頁, 「山本」A-35-37	3-5
隠岐国							
知夫郡							
	黒木村						
		四十一年六月十六日/隠岐国知夫郡黒木村/大字美田字居 ノ牧/穴居遺蹟下海岸	自然礫	○	1908	「山本」A-35-40	
日向国							
児湯郡							
	妻村						
		日向国児湯郡妻村/妻神社東部付近路上/立会人 長田鉄 見 明治廿八年四月廿七日収	打製石斧	×		「目録」石第二号	
	石貫村						
		日向国児湯郡石貫村/大山祇命御住居跡/立会人井上勇雄 /長田鉄見 明治廿八年四月廿七日収	分銅石(マ マ)	×		「目録」石第三号	

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	挿図番号
西臼杵郡							
	田原村						
		日向国西臼杵郡田原村/熊野神社附近/明治廿八年 収	石鏃	×	1895	「目録」鏃第二号	
	上野村						
		日向国西臼杵郡上野村大字下野/字北窪畑ヨリ出 明治廿八年三月廿四日譲受/(明治十年頃 同村江藤又四郎/発掘セリ)	石鏃	×	1877 (1895)	「目録」鏃第三・四号	
	不明						
		【日向/□□□】	石錘	○			5-8
美濃国							
武儀郡							
	谷口村						
		美濃国武儀郡谷口村/矢落街道(二重線ケン)/明治十八年金築/氏収ラル (金築有/夫君ヨリ収)	石鏃	×	1885	「目録」鏃第一号	

*1 資料に記載された墨書の内容および現存しない資料については「千代衛目録」の記述。大谷による追記は《 》内に示した。貼紙の内容は【 】で示した。「大谷ノート」の記載は〔 〕で、「山本考古資料」の記載は『 』で表記した。

*2 別の採集者から受領した年次は()で示す。

*3 「千代衛目録」は「目録」,「大谷ノート」は「大谷」,「山本考古資料」は「山本」と略した。